

例会抄録

新たに発掘された養生所遺跡の保存について

相川 忠臣

養生所遺跡保存のために緊急特別発言の機会を与えていただきより感謝申し上げます。

出島と西役所，唐人屋敷と背後の養生所のある小島佐古の丘は，港内の蘭船や唐船と共に幕末長崎の原風景です。ポンペ・ファン・メールデルフォールトは，小島佐古の丘に日本初の近代的西洋式病院，養生所を設立しました。養生所跡は長崎医学校校地にあり，後に佐古尋常小学校が設置されました。

小島佐古の丘にある仁田小学校と佐古小学校が，小学生の減少により6年の歳月を要して2016年4月に統合されました。仁田・佐古小学校の小学生は現在仁田小学校で学んでいます。両校共に校舎は古く，佐古小学校校地に新校舎棟と新運動施設棟を建設する予定です。

長崎市文化財課による佐古小学校校地の発掘調査で2015年10月，養生所北棟の礎石と冠木門の瓦敷が発見されました。養生所は二階建ての南北二棟からなります。北棟は梅毒病院として使用され，北棟西側石積みが幸運にも残存し，北棟南側の砂利を積み上げたたたきも東西に長く残っていました。

養生所遺構の発見は医療人にとり心躍る出来事でした。早速長崎大学長と医学部長は長崎市長に会い，十分な調査と連絡を密にと頼みました。長崎大学学長，医学部長，長崎県医師会長，長崎市医師会長の四者連署で，養生所，医学所と分析窮理所を十分調査し，国の史跡申請などを考えるようにとの要望書を2016年2月に市長に提出しました。半年なしのつぶてで，学長より申し入れ9月に説明を受けると，養生所の上には新運動施設棟が，医学所と分析窮理所の上には新校舎棟が建てられる予定でした。

モーニッケの幕末日本の医療報告によれば，公衆衛生行政施策は皆無で，伝染病患者を隔離する

病院もなく，国立医学校も医師国家試験もない悲惨な状況でした。それを打破する近代医療革命は養生所を舞台に始まりました。

ペリー来航後，対外危機が頂点に達した1855年，海軍設立のための海軍伝習がオランダ政府の協力で長崎で開始しました。1857年，ポンペは西役所で医学伝習を開始，近代西洋医学を系統的に教えました。日蘭友好の象徴である養生所が建立され，その屋上には日本とオランダの国旗がはためいていました。ポンペは侍・町人，西洋人・日本人の差別なく治療し，医師は自分自身のものでなく病める人のものであると戒め，民主的な患者中心の医療を行い，封建社会に育った弟子達に衝撃を与えました。衛生思想は松本良順らにより普及しました。

ポンペの跡を継いだボードインは分析窮理所を設置してハラタマを招聘，物理学，化学等が教えられました。養生所は精得館と改名，明治維新後長崎医学校となりました。精得館頭取の相良知安はボードインにオランダの医療法を，フルベッキにアメリカ憲法を学びました。維新政府に登用された相良は大学東校を設立，ドイツ医学を導入しました。大学東校に佐藤尚中を，大学南校にフルベッキを迎え，近代教育を担う大学を設立しました。長崎医学校長であった長与専斎は文部省に出仕，岩倉遣欧使節団に加わり，英米独の医療を視察後，オランダで医療監理制度を調査しました。長与専斎は帰国後，相良の構想していた醫制を整備して施行，衛生局を創立して万人の健康を護る公衆衛生行政を開始しました。

漢字交じりの日本語は蘭文和訳の過程で進化，何でも翻訳できるようになりました。数世紀かけて物理・化学や医学の専門用語と概念が日本語に定着したからこそ，速やかに近代的な科学技術や医学を導入できました。開国後は人文科学の専門

用語と概念が日本語に速やかに取り込まれました。日清戦争後、朝鮮と台湾には日本語による小学校から大学までの近代教育が定着し、公衆衛生行政により人口が著しく増加しました。中国では和製漢語が近代化の手助けをしました。小島佐古の丘に発祥した近代教育、民主的な考え方と公衆衛生行政は東アジアに普及、養生所はアジアの国々にとっても医療近代化の象徴です。

養生所遺跡群は佐古小学校校地にあったので、都市化の荒波が寄せる中、奇跡的に保存されてきました。佐古小学校校地を後世に残す決断をして、医学所、分析窮理所や長崎医学校の遺跡の徹底した調査が必要です。佐古小学校校地に出土する価値ある遺跡を国の史跡に申請すべきです。将来県庁移転後調査されるであろう海軍伝習のもう

一つの史跡、西役所跡と共に世界遺産指定の可能性もあります。

長崎大学医学部は2016年11月に新聞広告で養生所遺構の重要性を訴えました。同年12月、長崎新聞は一面を割き小島養生所遺構の保存問題を取り上げました。『養生所を考える会』は長崎市議会の教育厚生委員会に2回陳情書を出し、池知和恭代表と副代表の私が委員会に出席しました。

六史学会の年末例会で緊急発言をしてご協力を御願したところ、日本医史学会と洋学史学会から養生所遺跡群保存の要望書を出していただけることになり、心より感謝しています。

(平成28年12月六史学会合同例会)

牛痘伝来をめぐる一考察

青木 歳幸

我が国に伝来した牛痘が活着したのが、嘉永2年(1849)であることは、学会の通説であり、間違いがない。しかし、その伝来日と種痘実施日は、確定できていなかった。本報告では、その理由と伝来日の確定と、長崎での伝播の実態を明らかにする。

伝来日について、富士川游氏は「嘉永元年十月(或ハ曰ク七月)入港ノ蘭船ニテモーニッケの牛痘苗ヲ齎セシハ則チコレガ為ナリ。然ルニコノ時モーニッケ齎ストコロノ痘苗ハ遂ニ発痘セズ。翌嘉永二年七月入港ノ蘭船ニテ牛痘痂モーニッケノ許ニ達セリ、由リテ之ヲ三名ノ児ニ種痘セシニ、二児ハ感ゼザリシモ、一児ハ感受シテ善良ノ痘ヲ発セリ」(『日本医学史』595頁, 1942)とあり、嘉永2年7月入港としている。以後、主な研究書で伝来日を見ると、古賀十二郎氏は、嘉永2年(1849)6月(『西洋医術伝来史』1947, 1972年復刊, 456頁)、添川正夫氏は、嘉永2年6月(1849年8月)(『日本痘苗伝来史』, 1987, 45頁)、深瀬泰旦氏は、「嘉永2年6月、オランダ商館医オッ

トー・モーニッケによって長崎にもたらされた牛痘痂は、佐賀藩医榎林宗建(1802~1852)の手によって7月17日に宗建の子を含む3児に接種され、宗建の子唯一人が善感した。」(『天然痘根絶史』2002年, 269頁)とし、同氏は、『わが国はじめての牛痘種痘 榎林宗建』(2006年, 45~47頁)では、嘉永2年6月伝来とし、伝来日が特定できていない問題点を指摘している。同氏は「榎林宗建とオットーモーニッケ」(『九州蘭学』2009年, 257頁)では、接種日は6月26日といわれていると述べている。

アン・ジャネッタ『種痘伝来』(岩波書店, 2013)によって、オランダ商館日誌とモーニッケの記録から、牛痘苗伝来日は、西暦1849年8月11日、和暦で嘉永2年6月23日、種痘日は6月26日と特定した。以後の研究、たとえば山内一也氏の『近代医学の先駆者』(2015年, 149頁)では、伝来日には触れてはいないものの、種痘日を6月26日としており、アン・ジャネッタ氏の研究をふまえている。ただし、佐賀への伝来等は、